

「私の日印交流」

岩田紘行 慶応義塾大学・国際関係会GM
 公益財団法人日印協会 個人会員
 富山県知事委嘱「とやまふるさと大使」

57年前、昭和42年～43年（1967-68年）に母校慶応義塾大学の「国際関係会」IIRの交換学生としてインド・マドラス（現チェンナイ）のLoyola collegeへ1年間留学（遊学）しました。私のパスポート上のインドVISASはNo.2010でMadrasで1年間有効でした。当時のマドラスはドラビダ人の独立機運が高く、「タミルナードを我らに」と叫び集会・デモを盛んに行っていました。デモの後、エチルアルコールを飲み200人以上の死者が出たと新聞では報じられていました。若いインド人によく聞かれるのが、「50年前のインドはどうでしたか？」です。小生が留学（生活体験）した学校の寮では、学生は暗かった様な気がしました。当時のアート系大学では男子のみの通学でしたが、（インドが男女共学制になったのは1998年以降です）大学での一般学生（インドではエリート階級に所属）の目は輝いていなかった気がしました。Slaves of Loyolaと云う言葉を聞いた事が有りました。私がインドに居た1967年に発行された切手を2点持ち帰りました。1点は「インド⇄欧州電信開設



100周年記念・1967年発行」です。なんと1867年（明治維新1年前）に既にロンドンとカルカッタ間は電信で結ばれていたと云う史実に非常に驚かされた記憶が有ります。もう1点は「インド義勇軍創設記念・1941.12.26 1967年記念切手発行」でShri Rashbehari Basu（中村屋のボース）がインドの英国からの独立宣言を東京で行いインド義勇軍の初代総裁に就いた事を記念しての物でした。小生は学生時代、インドへ約1ヶ年間遊学した次第ですが、講師用の寮に入ったとはいえ大変苦しい体験（生活慣習が大きく違う）でした。「生活慣習が大きく違う」という点では、個人に

より異なる訳で、食生活（カライ、ヨーグルト系のスッパイ味、腐敗したような匂い等がダメ）そして「ケタタマシイ、ダンス音楽が好きではない」、清潔感が違う、などが今となってみれば、最大の苦しい体験だった様な気がします。一方、南インド発祥と云われる楽器のヴィーナやシターの演奏、タブラーとの共演を観賞するのは大好きです。演奏者同志の掛け合い、コンセプチュアルな演奏は楽しく、インド古典舞踊のカタクダンスやカタカリなどを今も鑑賞しています。就職してからは14年間、大日本印刷(株)の社員として米国、NY Chicagoでの駐在生活を送

TOPIC: CONTRIBUTION

りましたが、この間インドとの関係はほとんど有りませんでした。前述「国際関係会」IIR について少し説明させていただきます。1955年の創設のクラブですが、米国 Stanford Univ.からの「学生を年間交換しよう」との呼びかけで始まりました。

その後カナダ・バンクーバーのUBC、Victory Univ.との年間交換、そしてインドとは1960年からデリーのSt.Stephen's collegeと、南のLoyola collegeとは1961年から、それぞれ隔年での年間交換を始めました。皆、私立のArt系の大学同士の交換であり、慶応の場合はスタンフォード大と同じく運営が学生の手によるものでした。IIR, Institute of International Relationsとスタンフォード大と同じく大仰な名前ではじめました。来日する年間交換留学生の生活費は最初OBからの寄付で賄われ、後年は学生の自治会費で行われました。創立当初から現在に至るまで、すべての運営、活動は学生の手で行われ維持されています。インドからの留学生は、St.Stephen's college (インドのArt系大学としては常時ランク1位です)からはNarashimha Murthy (故人・教育者)、Aftab Seth (外交官・教育者)、Chander Rai(故人・米国IT関係出版の第一人者)、Arif Hussain (インド外交官・元WTOインド代表)など(敬称略)錚々たる人脈です。Aftab Seth氏



は2000年—2003年、在日インド全権大使として赴任しました。1998年インドは原水爆実験を行い、これに対応して、日本政府がODAを凍結するなど日印関係が戦後最も冷めた時でした。当時のインド首相バジパイ氏は最も親日家であり、日本語を流暢に話せる特命全権大使としてAftab Seth氏を任命し、氏は着任してきました。我々IIRメンバーは「Aftab Seth君を支援する会」を立ち上げ、日印交流の企画・実行で協力しました。2002年にインド大使館・外国人駐在員協会(FCCJ)・慶応IIRの3者の共催でFCCJダイニング・ホールでのINDIA NIGHTの開催や現役学生によるINDIA DAYなどを行いました。後日、彼は慶應義塾大学の教授を務め、Global Security Centerの所長に就任しました。2015年秋の叙勲で最高位

の旭日大綬章を受けられました。以降Aftab Seth氏は江東区大島にあるthe Global India International School in Japanの理事会議長として就任し、毎年訪日しています。そして今も小生を含め数人でKeio Boys Meetingとして、HUBビールで乾杯、お寿司での会食と歓談を毎年楽しんでいきます。慶応義塾大学の「国際関係会」(IIR)は日本で最初に1955年に学生だけの手により、学生の為の年間交換留学生制度を創設した学生団体ですが、インドとの年間学生交換を行い、10名のインド学生を受け入れ、12名の慶応学生を派遣しました。現在IIRは短期(約1週間程度)の学生交換のプログラムを行っています。現在も現役学生が活動の主体ですが、一番苦勞するのはホストファミリーの確保であり、最大の課題です。(出来れば読者の方でホスト

ファミリーが可能な方はご協力をお願い致します) 現役学生による日印交流のプログラムはIIR/NEXTプロジェクトとして Re-discover yourself and your countryのスローガンを掲げ日印交流の企画を立案し実行しています。

上記の関係から、私は2009年日印協会の個人会員として参加すると共に、協会の活動特に催事企画のお手伝いをしました。特に思い出に残る企画としては「上野動物園でのインド象・インディアの物語を記念する永久保存用のパネルの作成を行い、記念式典を行いました。今一つは2012年に日印国交樹立60周年記念の催事を行ったことです。特に「日印交流150年の記録写真展」を各地で行いました。インド大使館を初め、経団連会館ホールでの開催や、3月12日デリーの国際文化会館での式典と1週間にわたる写真展を行いました。この写真展はチェンナイへも移動し開催されました。この訪印の折、インドでの母校(前述2 colleges)を訪問しましたが、若い学生たちの目は輝いていたことを思い出します。そしてこれらの写真をベースに解説のナレーションを取り入れたDVDを手作りで作成し、諸企画会場で流すことになりました。そして個人として企画したことでは、「富山インド協会」の創設に寄与したことです。小生は富山市出身ですが、その当時富山県知事であ

った石井隆一君は富山大学付属小・中学時代の親友であり、インドとの交流の重要性を説明し理解を得ました。後日、彼は北日本新聞社長を紹介してくれ、短時間の内に創設がなりました。「とやまふるさと大使」としての役目に貢献出来、かつインドとの交流に微力ながらも寄与できたと自負しています。日印協会での5年間は私にとって、とても充実した時間を得ましたが、何よりもインドを愛する友人と多くの知己を得たことです。心より感謝するところです。

「インドについて」ですが、多様な国・社会です。インド(インダス河の向こうの人々⇒よく解らない人々が起源では ?) (Hindu→Hindoo→Hindi→India)ですが、ヒンドウ教の(人々の)世界であり、宗教からくる考え方、信じるものが違う等があると思います。その最たる事例では、ガンジス河で沐浴し、その水を飲むと言った例がありますが、「私もよく解らない」と言うのが本音です。それでも日本とインドとの交流は1500年前より始まっていますし、インドの存在は今後益々重要となっていくわけですので、日印の関係(交流)について特に明治以降の友好の歴史について私はこれからも更に勉強していきたいと思っています。交流ということから言えば究極の交流は国際結婚であ

り、移民(市民権を得る事)による定住とその地での社会的同化、貢献ではないでしょうか。移民を決意する動機は生活の為と言う事も有りますが、移住先の地、国に同化したいという意志、気持ちが有るからだと思います。自分の能力を発揮する場所がその地にあると思うからでありました。古代よりインドは多くの移民を出してきました。米国、カナダそして東アジア(ミャンマー、マレーシア等)さらに中近東(サウジアラビア、他)遠くは南アフリカへも多くの移民を出してきました。グローバル化するインドですが、日本へも移住してきた(定住した)インド人がかなりおられます。若い世代に向けてあえて言うておきたいです「交流する事、互いに知り合う事が第1歩です。人と人の交流がもっと盛んになる事を望むものです。特に学生交流は大事です。」